

会議記録

次のとおり、会議記録を公表します。

会 議 名	令和８年度第１回高松市自治推進審議会
開催日時	令和８年８月１９日（水）１３時３０分～１４時４７分
開催場所	高松市役所３階 ３２会議室
議 題	(1) 会長・副会長の選任について (2) 高松市自治基本条例の見直しについて (3) 市民参画の充実に向けた「まちづくりタウンミーティング」の活用について (4) その他
公開区分	☒ 公開 ☐ 一部公開 ☐ 非公開
上記理由	
出席委員	高塚会長、秋山委員、金委員、末澤委員、林委員、吉澤委員
傍 聴 者	３人（定員１５人）
報道機関	０社
担当課及び連絡先	政策局政策課 電話：０８７－８３９－２１３５

会議経過及び会議結果
会議の概要は、次のとおり。 議題（１）会長・副会長の選任について 高松市自治推進審議会条例第５条第１項の規定により、委員の互選により会長及び副会長が選任された。 （会長 高塚順子委員、副会長 小早川龍司委員） 議題（２）高松市自治基本条例の見直しについて 資料１ 事務局から、庁内で確認・検証の上、条例の見直しの必要性がなかった旨の説明を行った。（意見なし） 議題（３）市民参画の充実に向けた「まちづくりタウンミーティング」の活用について 資料２ 【事務局から説明】 ・まちづくりタウンミーティングの実施手法や対象者の選定について （会長） 高松大学でのまちづくりタウンミーティングに参加した教員及び学生の感想として、若手職員から高松市役所に就職した動機などを聞いたことが、学生のキャリア教育に大変良かったという声があった。一方で、市の取組を紹介されても、学生がそれを「自分事」として捉えられないようなところがあった。 教員からの提案として、市政に関する総括的な説明より、最近できたアリーナ

会議経過及び会議結果

など現実的で興味を引くテーマに絞った方が学生も興味を持ちやすいのではないかという意見があった。

(A委員)

若年層・子育て世代をターゲットに絞った実施は良いことと思うが、市政全般を説明するのではなく、ターゲットに合わせたテーマを取り上げるべき。大学に進学する人のうち、県外への進学者が8割というデータがあり、若者の流出を防ぐというよりは、地元を離れるという前提で政策に取り組む必要があるのではないか。関係人口という視点から、幼い頃から地域への愛着心を育んでいき、他県に就職や進学しても地元になんらかの関係を持ってもらうことを考えて、まちづくりタウンミーティングを実施してみるのも良いかもしれない。

・「自分たちの意見で変わるものなのかイメージがわからない」と感じている参加者が、自ら関わりたいと思ってもらうための仕掛けについて

(B委員)

タウンミーティングの成果がどのように市民にフィードバックされているかが重要だと思う。参加者が「自分の意見が反映された」と実感できるように、成果を目に見える形で残していくことが必要である。

(C委員)

継続性が人の行動・意識変化には不可欠であり、単発での参加ではなく、年間通じた継続参加の仕組みづくりが必要ではないか。まずはイベントや講演会で広く情報提供する機会を提供しながら、その中で、もう一歩踏み込んで関わってみたい人を募り、その人達にワークショップのような活動の場を作りながら経験を積んでもらいアンバサダーになってもらって、シビックプライドを広く伝授していくような継続的な仕組みができれば有効ではないか。

(事務局)

昨年度、高松東高校でのまちづくりタウンミーティングに参加してくれた生徒が今年も参加してくれた。同校では、探究の授業で、高松市の施策のことを考えていただけることになり、継続性を持って取り組んでいると思っている。

(D委員)

小学生には高松市全体の施策を説明して理解してもらうのは難しく、まずは身近な地域の良いところを知ってもらうことが地域への愛着、ひいては高松市への愛着を育むことにつながると考えており、市の取組においても、まずは高松市を知るための取組から始めると良いのではないかと思う。

(E委員)

鬼無地区では小学生のときから、盆栽を一人一鉢持ち、それを卒業まで育てる

会議経過及び会議結果

という運動をしている。学校を卒業してもその盆栽は家で育て続けている。このような取組を通じて、鬼無で育った人は鬼無に対しての誇りをすごく持っている。小さい頃から自分のまちの素敵なところを身をもって体験することは、シビックプライドの醸成に有効である。

(A委員)

まちづくりタウンミーティングでの議論の内容がどのように市政に反映されたのかを見える化する方法として、まちづくりタウンミーティングに参加した人に例えば人材バンクのように登録してもらい、検討状況などを継続的に情報発信する仕組みが有効ではないか。そういう人たちが今後、高松市をもっと盛り上げてくれる人材となっていく可能性があると思う。

・関心は高まったが、高松市に住み続けたいとはまだ思っていない人に対するアプローチについて

(C委員)

大学生は、まちづくりタウンミーティングをきっかけに市政に関心が高まったとしても、その後高松に住み続けることなく就職などで県外に出ていくのはやむを得ないところがある。そのもう少し前の世代で、シビックプライドを若いうちから育てていく方が、取組として有効的かと思う。

(A委員)

大学でも、学生の県内就職に力を入れているが、学生の人生設計は彼らの個人的な選択であり、なかなか地元を離れるなど言うことはできないと思う。

むしろ、離れてもつながりを切らさないという姿勢が重要であり、県外に出ても、地元を応援したいとか、何らかの形で関わりたいと思ってもらえるような取組の工夫が必要である。

(会長)

若者が外に出たいと考えるのはやむを得ない部分がある。その前提で、いつでも帰って来られる受け皿を用意することが重要。例えば県外に出て築いた人脈などを持ってUターンしてくれると、地元にとってもプラスになることがあるのではないか。外の世界を知った上で初めて高松の良さを認識できることもある。

(B委員)

高松から一度県外に出て、高松に帰ってきた人達を対象にしたタウンミーティングを開催してみてはどうか。

(会長)

Uターン者のコミュニティのようなものを市では把握しているのか？

会議経過及び会議結果

(事務局)

Ｕターン者のコミュニティは把握できていないが、関係人口のコミュニティとして、ＹＯＫＫＥ高松という、オンラインコミュニティを作っている。その中で、のやりとりを見ていると、小さい頃高松に住んでいて、一度県外に出たが子育てのために高松に戻ってきた等のメンバーも存在する。そういった関係人口のコミュニティの中で、Ｕターン者を集めたイベントなどを開催してみるのも良いのではと考えている。

(Ｂ委員)

市の関わりのあるコミュニティだけでなくそれ以外の個人的なつながりから生まれたコミュニティの情報もキャッチして、そこから声を吸い上げていくことも必要ではないか。

(Ｄ委員)

子育て支援施策をより充実させ、子育てしやすいまちというイメージがもっと出てくれば、高松に住んで子育てしようとする人もより多くなるのではないかな。

(Ｅ委員)

まちづくりタウンミーティングの議論をきっかけに生まれた令和７年度二十歳のつどい実証実験については、県外から多くの若者が高松に帰ってくるこの機会に県内企業等を紹介することで、若者が今後の高松での暮らしを改めてイメージできるようになり、とても良い取組だと思うので、もっとアピールしていても良いと思う。

(事務局)

二十歳のつどいでの地元企業の紹介等については、昨年度に実験的に実施したが、今年度は県立アリーナに会場を移して実施予定である。これまでは式典がメインだったが、今回からはそれに加えて、シビックプライドの醸成につながる取組も実施したいと考えており、まずは、県外に出ていった若者が戻ってくる機会に地元企業を知ってもらうための企業ブースを設置したい。

また、本日意見をいただいたように、一定若者が県外に出ていくことについては念頭に置きながらも、地元の良さを知った上で選択をしてもらうための取組を実施していかなければならないと感じている。我々行政として今できることは何かということを考えながら、今後とも取り組んでいきたい。

議題（４）その他

(事務局)

本日いただいた意見を踏まえ、今後も自治推進に取り組んでまいりたい。

以上

